



気狂いじみたおしゃべりと  
地を這う沈黙……  
夏の日 of シーソーゲーム。

# 機械

チェーホフ作「プラトノフ」より

ソビエト  
ニュー・ウェーブの  
旗手！  
ニキータ・  
ミハルコフ  
監督作品



# ピアノ

# じかけ

製作モスフィルム  
脚本アレクサンドル・  
アダバシヤン  
ニキータ・ミハルコフ  
撮影パーヴェル・レベシエフ  
日本海映画株式会社配給

*Sovexportfilm*

# 未完成



# た



# の



# の

頹廃か……  
希望か……  
挫折か……  
知識人の愛と  
苦悩を衝く  
残酷喜劇。

# め

# の

昭和55年度  
芸術祭参加  
作品

サン・セバスチャン国際  
映画祭[金の貝殻賞]

# 戯曲

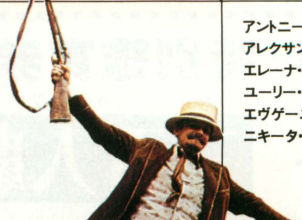


*Неоконченная  
механическая  
пьеса  
для  
пианино*

# の

# の

アントニーナ・シュラーノワ  
アレクサンドル・カリヤギン  
エレナ・ソロヴェイ  
ユーリー・ボガトイリョフ  
エヴゲーニヤ・グルーシナ  
ニキータ・ミハルコフ



# 機械じかけのピアノのための未完成の戯曲

●これは現代ソビエト映画の最高水準を示す作品であるだけでなく、世界の映画史の上でもユニークな立場を主張できる傑作だ。チェホフは自分の戯曲は喜劇として演出されなければいけないと言いつつ、その難問がここからはじめて見事に解決されているし、チェホフの時代を借りて現代ソビエトの知識層の苦悩がナマナましい息づかいをもって語られている。やさしくて、切なくて、涙がこぼれるほど笑わせられるのだ。

佐藤忠男(映画評論家)

●試写室ではじめて観せてもらったのだけれど、見終わってすっかり魅了されてしまった。この映画にたいへん感心したのは、現代の映画的手法の新しいいろいろな試み(アラン・レネの動的なカメラ・ワーク、フェリーニの人物配置など)が大胆にとり入れられて映画そのものとしてもすばらしいだけではなく、さらにそのような映画的手法によって、チェホフの戯曲のなかに登場する主要人物の原型がみごとにとり出されているからである。

毎日新聞より(中村雄二郎)

●チェホフの劇世界は、百年間、生きてきて今なお「若い」。

その事実を、ソ連の新進映画監督ニキータ・ミハルコフが証明してみせてくれた。しかもとびきりおかしく、美しく、痛切に。(中略) また、映画全体の仕立て方で特筆すべきはそのリズムだ。緊迫した瞬間、あるいは涙腺を刺激しそうな感傷的な一瞬、ぎこちない沈黙が流れるバツの悪い数秒間などがあると、必ずそれに踵を接して途方もなく滑稽な場面が続く、直前の「悲劇」なり「感傷」なり、「ロマンス」なりを相対化してしまうというリズムである。

朝日新聞より(樹)

## 注目の監督ミハルコフが世界中をうならせた傑作 期待を集めてついに公開!



### ●解説

ニキータ・ミハルコフ監督は一九四五年生まれ、俳優としてはハンサムで魅力的なスタイルを早くから知られていたが、監督作品も最新作「オプロモフ」を含めてすでに6本、殆んどが海外の映画祭で受賞するなど、話題を集めてきた。兄のアンドレイ・ミハルコフ「コンチャロフスキー(「貴族の巢」)」「ワニニヤ伯父さん」ほか)やタルコフスキー(「惑星ソラリス」)「鏡」ほか)らの戦後派に続く、モスフィルム部のニュー・ウェーブを担う一人である。

「機械じかけのピアノのための未完成の戯曲」はチェホフ大学時代の戯曲「プラトリーノフ」に、「地主屋敷で」「文学教師」「二年」「わが人生」などの短篇のモチーフを加えて映画化したもの。世紀末の崩れつつある貴族の田園生活とロシヤ・インテリゲンチヤをおおう退廃的気分を、今日の感覚にあふれるユーモアと階級に包んで描きあげた見事な演出力、完成当時32才のこの若手監督の名を国際的にした。第25回サン・セバスチアン映画祭「金の貝殻」賞受賞作である。

主演のアレクサンドル・カリヤギン、ユリー・ボガトイリョフらのモスクワ芸術座の若手俳優陣、「戦争と平和」「チャイコフスキー」でおなじみのレニングラードの名舞台女優アントニーナ・シュラーノワ、そのほかいずれも舞台の名優が顔を揃えての俳優アンサンブルの素晴らしさも、この映画の話題の一つ。ミハルコフ監督に抜擢されてサーシヤを演じたエヴゲニーヤ・グルーシエンコはモスクワのマールレー劇場所属、映画は初出演だが、お人好しで善良な妻を見事に好演している。

### ●物語

前世紀末のロシア。木の葉がぐれに館のバルコニーが映える美しい田園風景……。ある暑い夏の日の昼下り、その木立ごしに戯れ興

ずる人々の声が聞こえてくる。

ヴォイニーツェフ將軍の未亡人アンナ・ペトロヴナの館に、近隣の地主や、退役大佐トリレツキー、その息子で医者ニコライ・トリレツキー、妻を連れた小学校教師プラトリーノフらが、將軍の先妻の息子セルゲイの新妻にひと目会おうのを口実に、まるで長い冬眠から覚めたかのように久方ぶりに寄り集まっている。そしてアンナはまた、ここらでは珍しい高価な自動ピアノで皆を驚かさうと云う魂胆である。

ところでセルゲイの新妻ソフィヤこそ、プラトリーノフの初恋の女性だった。思いがけない再会に、静かで平穏な日々を送っていたプラトリーノフの心が揺れ動く。その胸の動揺を見られまいと、自ら道化役を演じて見せるプラトリーノフ。

やがて宵闇をついて上る火花が水面に映え、なすこともなく、ただ乱痴気騒ぎを繰り返している人々のさんざめきのなか、水辺で抱きあうプラトリーノフとソフィヤ。だが二人にとって、もはや時の流れは呼びもどしようがない。二人の語らいはついにかみ合うこともなく、スキャンダラスな騒ぎとなる……。

НЕОКОНЧЕННАЯ ПЬЕСА ДЛЯ МЕХАНИЧЕСКОГО ПИАНИНО

(スタッフ)  
脚 本……………アレクサンドル・アダバシヤン  
ニキータ・ミハルコフ  
監督……………ニキータ・ミハルコフ  
撮影……………パーヴェル・レベシエフ  
美術……………アレクサンドル・アダバシヤン  
アレクサンドル・サムレンキン  
音楽……………エドゥアルド・アルテムィエ  
ドニゼッティ「愛の妙薬」、リスト「ハンガリー狂詩曲」より  
録音……………ワレラン・ポプロフスキー

(キャスト)  
アンナ・ヴォイニツェフ(將軍の未亡人)……………アントニーナ・シュラーノワ  
セルゲイ・ヴォイニツェフ……………ユリー・ボガトイリョフ  
ソフィヤ・エゴロヴナ……………エレナ・ソロヴェイ  
ミハイル・プラトリーノフ……………アレクサンドル・カリヤギン  
その妻・サーシャ……………エヴゲニーヤ・グルーシエンコ  
ボルフィーリー・グラゴリーエフ(地主)……………ニコライ・バスターコフ  
パーヴェル・シチェルブーク(地主)……………オレーグ・タバコフ  
ニコライ・トリレツキー(医者)……………ニキータ・ミハルコフ

1977年/モスフィルム製作/カラー作品  
ソヴェクスポルトフィルム提供  
日本海映画株式会社配給



12月20日(土) 奇  
三百人劇場5周年記念

特別鑑賞券 1000円

都営地下鉄・三田線(千石駅前)

新春ロードショー

三百人劇場 (944) 5451

(当日・一般1400円、学生1200円)

劇場窓口、都内各プレイガイド、大学  
告団にて発売中。お問い合わせは、  
マイジャー(54)2508へ

平日	1:00	3:00	5:00	7:00
日・祝	12:00	2:00	4:00	6:00

●但し、12月29日(月)より1月3日(土)までは休館となります。

